
For the memory ~ Another story ~

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F o r t h e m e m o r y ｝ A n o t h e r s t o r y ｝

【Nコード】

N 6 7 4 8 V

【作者名】

u s a

【あらすじ】

F o r t h e m e m o r y の番外編。

コナンはいつから蘭が好きだったのか？

コナンが自分が小学生でないことを気付いたのはいつだったのか？

先に本編をお読みください。

1 a n o t h e r (前書き)

病院で目を覚ました時のコナン君の様子です。

1 a n o t h e r

オレが目を開けると、まず白い天井が見えた。

ここはどこなんだ・・・？

まず最初に浮かんだ疑問はそれだった。

誰かが何かを口々に叫んでいるのが聞こえた。

どうしてオレはここにいる？

オレは思いだそうとした。

でも・・・。

何も、思い出せない。

続いて、激しい頭痛。

どうしたんだ、一体。

何があっただんだ。

ふと、手に温かい感触があることに気付いた。

「コナン君」

目にいっぱい涙を浮かべた女の子が、オレの手を握って、オレをそう呼んだ。

オレは、コナン、ていうのか？

「奇跡だ・・・こんな小さな子が・・・」

そう誰かが言っているのが聞こえた。

子供？

小さい？

オレはその言葉に微かな疑問を抱いた。

だが、それについて考える前に、視界が覆われた。

「危ないことしちゃダメじゃない・・・」

どうやら、今の女の子がオレに抱きついたみたいだった。

オレと同じぐらいかと思ったら、体は全然大きかった。

「もう大丈夫なのか？」

髭を生やしたおじさんがオレを幽霊でも見るみたいな顔で見ている。

「あの・・・」

オレは何か言おうとした。

何を言うつもりかはわからない。

オレは誰？

ここはどこ？

あなたは誰？

だが口を開く前に、また女の子がオレを抱き締めようとした。

オレは咄嗟にそれ避けた。

「あなたは誰」

しばらくして、オレは江戸川コナンという名の小学一年生の少年であると知らされた。

先程の女の子とおじさんは、オレが居候していた家の人らしい。

「毛利、蘭さん・・・」

でも何かが引つ掛かる。

何か重要なことを、オレは忘れている。

頭痛に耐えながら、オレは窓の外を呆然と眺めていた。

すると、ドアが開いて、日本人離れした雰囲気の子が入ってきた。

「江戸川君・・・？」

その子はオレをそう呼んだ。

でもオレは答えなかった。

何か違和感を感じる。

江戸川コナン・・・。

それが本当にオレの本名なのか？

女の子はオレが何も言わずにいると、すぐに出て行った。

だが静かな時間も長くはなかった。

オレが看護師の方に点滴を打ってもらっている時、またドアが開いた。

「工藤！」

顔を覗かせた色黒の青年は、オレをそう呼んだ。

工藤？

それは誰なんだ？

「誰ですか？」

思い切って聞くと、その青年は顔をひきつらせた。

「な、何言つとんのや工藤。親友の顔忘れたんか？まだボケる年ぢ

やうやろ。

これやから関東人は・・・ボケがなつとらんわ」

また彼はオレを工藤と呼ぶ。

そしてオレを親友と言った。

オレが本当に小学一年生なら、彼とは10近く歳の差があるだろう。

やがて彼は看護師につまみ出されたが、オレは正直気になっていた。

あとから来たあの2人は、何か知っている。

オレの秘密を。

根拠はない。

でもきつと、何かをオレに黙っているような気がする。

それって一体・・・。

「・・・っ」

また頭痛だ・・・。

これが悪い夢だったらいいのにな。

明日になったら、記憶喪失なんか嘘で、いつも通りだったら・・・。

だが、痛みで現実を引き戻される。

これだけ痛かったら、頬をつねっても目は覚めねえだろ・・・。

オレはそのまま、眠りについた。

1 a n o t h e r (後書き)

えっと、番外編を、との希望があつたので書きました。

自信はないです、はい・・・(汗)

次は何を書くかも決めていません(^| ^ ;)

こんな感じですが、よろしくです

2 a n o t h e r

目が覚めた時、やっぱりオレは、昨日のことが夢でないことを悟った。

ぼんやりと窓の外を見た。

こうしていたら、気分が落ち着く。

「おはよう、コナン君」

ドアが開いて、昨日の蘭さん、って人が顔を覗かせた。

「おはようございます、蘭さん」

「敬語なんて使わないで」

正直、その方がいいと思った。

彼女に対しては、ありのままでいたい。

不思議とそういう気持ちがあるから。

「今日ね、写真を持ってきたのよ」

そう言っつて、彼女はオレの前にたくさんのアルバムを並べた。

見ていて楽しくはない。

オレにとっては、頭痛を起こす、憎らしいもの。

でもそれで彼女が喜ぶのなら・・・オレは見よう。

彼女の悲しげな顔だけは見たくない。

何故だかそう思うんだ。

写真に写る人、一人一人の説明をしている彼女。

でも何も思い出せない。

だけど、ふと一枚の写真が目にとまった。

「この人は？」

オレは、彼女がその人の写真を避けているのに気付いた。

時折チラチラとその人が写った写真を見ていたから。

「あ・・・そ、その人は、工藤新一って言って、私の幼馴染で・・・

」

少しどもりながらも必死で教えてくれている。

オレまで何だか真剣な目で彼女を見てしまった。

その途端、彼女はワツと泣きだした。

「えっ？」

あまりに突然だったから、オレは慌ててティッシュなどを差し出していた。

「だ、大丈夫？」

「う、うん・・・ごめんね」

そう言うてから、彼女はオレの病室を出て行った。

オレはその工藤新一という人の写真を手に取った。

見覚えがある。

でも誰だかわからない。

そういえば・・・。

昨日来たあの関西弁の人、オレを工藤って呼んだっけ。

もしかして、オレとこの人って、何か関係があるのか？

退院してすぐに、オレの友だちとかいう奴らが来た。

当然だけど、子供ばかりだ。

どうやらこいつらは、オレが記憶喪失だって知らなかったらしくって、

しばらくは涙目でオレを見ていた。

「ほ、ほな、く・・・やのうて、こ、コナンのために、今日は思い
出話とか聞かせたるか」

あ、まただ。

やはり、この服部平次とかいう人は、オレを工藤と呼ぼつとする。

だけどそれを絶対に誤魔化す。

なんでだ？

しばらく子供たちがオレに、自分たちで解決してきた事件を話してくれていた。

ていうか・・・。

オレ何で、こいつらのこと子供たちっていつてるんだ？

オレも一応子供なのに・・・。

それに何だか・・・。

こいつらには付いていけない。

なんていうか、テンションが高くて・・・。

記憶があった時のオレは、本当にこいつらについていけないんだろうか。

それが何だか疑問だな・・・。

どっちかっていうと、目の前にいる、茶髪の女の子の方が仲よさそ

うだったみてえだけど・・・。

この間も子供たちの中で見舞いにきたのはこいつだけだった。

でもなぜだか、こいつには子供らしさが微塵もない。

時々、ホントに子供か？って発言もするし。

「何かしら？」

「あ・・・いや、別に・・・」

オレはふと思い立って、言ってみた。

「みんなから見た僕ってどんな子？」

これで何かを思い出せなくても、オレがどういう人間だったかは知ることができる。

「歩美にとってはねえ・・・歩美の運命の人！」

あ、あはは・・・。

「キザで好奇心が旺盛すぎる子供」

オレこいつに嫌われるようなことでもしてたのか？

「少年探偵団の頭脳ですね。まあ一番はやはり僕でしょうけど」
「コナンはオレの子分だぞ」

ここはとりあえずスルーしておこう・・・。

「コナン君は・・・やはり、行動力のある子じゃったかのう」

行動力ねえ・・・。

「オレにとつちや、ただの生意気なガキやったな。まあ時々推理の役に立つ時もあるんやけどな」

すっげえムカつくのは気のせいか・・・？

「私にとっては・・・そうねえ」

蘭さんは少し迷うような顔をしていた。

「ナイト、かな」

「ナイト？」

「そう。コナンくんはね、よく私が危ない目に遭ったりした時、進んで守ってくれたの。」

そんな優しい子よ、コナン君は」

淋しそうに笑う彼女を見て、オレは胸が苦しくなるのを感じた。

どうして彼女の悲しそうな顔を見ると、オレはここまで辛いんだろ
う。

記憶を失う前、オレは彼女と何があっただ。

3 a n o t h e r

夕方、オレは蘭さんと平次さんと一緒に、夕飯の買い出しに行っていた。

蘭さんはオレに米花町のことを色々と話してくれるけど、なんだか落ち着かない。

何か・・・妙に建物が高いような気がする・・・。

・・・気のせいかな。

「それで、ここが帝丹高校。私もここに通ってるの」

そう言われて、オレはその学校を見た。

・・・見たことがある。

って、この町に住んでたんなら当たり前か・・・。

でも・・・。

毎日毎日、ここを見ていた。

そんな感じがする。

「・・・新一さんも？」

考えている途中、オレは自然とそう言っていた。

蘭さんや平次さんが驚いてオレを見た。

「ど、どうして？」

「ほ、ほら、蘭さんと新一さんって幼馴染なんですよ？
だったら、同じ高校でもおかしくないなあって・・・」

オレは適当に誤魔化したが、内心焦っていた。

何でこんなこと・・・。

まるで、自分のことみたいに・・・。

だが、2人は大して気にしていなく、蘭さんはスーパーに着いた途端、
精肉コーナーの方に飛んで行った。

「ほな行くで・・・コナン」

「あ、はい・・・」

何故だろう。

平次さんからコナンって呼ばれると、すっごく違和感がある。

いや、それに近い寒気が・・・。

なんて思いながら、オレ達は蘭さんを探しに行こうとした。

途中で、重そうな米袋が積み重なっている荷台が置いてあった。

それを避けて通ろうとした時だった・・・。

ドサツという音がして、オレは頭に痛みを感じた。

それと同時に、何かの映像が脳裏をよぎった。

見慣れたような風景。

今よりも高い目線。

隣にはオレよりも頭一つ分ほど小さい誰かがいる・・・。

オレに向かって、笑って話しかけている。

そして、その子と一緒にオレが足を運んでいたのは・・・さっきの高校だった。

「だ、大丈夫か!？」

平次さんが慌てて落ちてきた米袋をどかして、オレを引っ張って立たせてくれた。

「コナン君、どうしたの、一体・・・」

騒ぎを聞きつけてらしい蘭さんも青い顔でこっちに来た。

「な、何でもないよ・・・」

オレはかるうじてそう言ったが、さっきから頭が酷く痛む。

過去を思い出そうとすると起きる、いつものあれだ。

でも、オレが高校に入っていったということは、オレは小学生ではないということなのか？

じゃあなんで、オレは今小学生なんだ？

「埃ついてるよ」

蘭さんはそう言って、オレの服についていた埃をはらった。

その瞬間、蘭さんの顔が近くにあって、オレは少しドキッとした。

いい香りがしてきて、心臓がバクバクと大きな音を立ててる。

こんな気持ち、今は初めてみたいけど……。

何だろう。

前にもあつた気がするな。

誰かに対して、ドキドキしたり、イライラしたり、モヤモヤしたり・
・・。

飽く迄も、気がする……だけだな。

4 another (前書き)

今回はちょっと飛んで、トロピカルランドのことです。

本編とは多少違うところがあります。

4 another

賑やかで明るくて、なんだか懐かしい場所。

蘭さんに連れられて、この場所に來た時、オレはそう感じた。

このトロピカルランドとかいう遊園地に、オレは來たことがある。

さつきから、聞き覚えのある声がオレの耳から離れない。

“推理オタク”だとか、“ホームズバカ”だとか、
何だかオレを馬鹿にしたような言葉ばかりだけど・・・。

その声を聞いていると、自然と心が癒される。

たとえどんなことを言われていても、どこか嬉しいような気持ちさえある。

誰だかはわからない。

でも、懐かしくて、とても好きな声だ。

聞いているだけで、ホッとする。

だが、その声をゆっくりと聞こうとする前に、
歩美という女の子がオレの手を引っ張って走り出す。

おかげで、まだここにきてから一時間程度で、オレの身体はへとへとだ。

オレがしばらくボーっとして休んでいると、頬に冷たい感触がした。

「うわっ」

驚いて頬を触っていると、横で平次さんが白い歯をニツとのぞかせて笑っていた。

「驚いたか？ほれ、お前の分や」
と言って、コーラを差し出してきた。

「あ、ありがとう・・・」

オレはコーラを受け取って、彼を見た。

一瞬、彼の後ろに人影が見えた気がした。

“ほら、のど渴いたろ” って言って・・・いるような気がする。

どっかで見たことあんな。

誰だっけ・・・？

だけど、またしても考えに浸る暇もないまま、また子供たちと共に走らされる。

噴水の側で、また何か声がした。

楽しそうな笑い声と、嬉しそうな歓声。

オレの目に、あるはずもない虹が見えた。

それを見て、“虹だわ・・・！”と、誰かが言っている。

もちろん、そんなことを言っている人などいるわけがない。

散々あちこちに連れ回され、これが最後！と、パレードに連れて行かされた。

キラキラと光りながら目の前を通っていく行列は、確かに綺麗だった。

でも、オレの目は別の方を向いていた。

「綺麗ね、コナン君！」

「あ・・・う、うん」

綺麗だ。

間違いなく綺麗だ。

だけど・・・オレにとっては、今まさにパレードを見ながらその光に包まれている彼女・・・蘭さんの方が、とても美しく見えた。

まるで、天使のように輝いていて・・・。

聖母のような笑顔を浮かべていて・・・。

って、オレ何考えてんだ！

んなことより、さっきの声とかに集中・・・

「わあっ！見て見て、コナン君！」

・・・できない。

そ、そんな後ろからギュッと抱きしめられたら・・・／／／

む・・・胸が・・・／／／

「うわあっ、すっごーい！」

確かにすごい。

すごいんだけど・・・。

それよりも何よりも、蘭さんの顔が近い！

「なんやボウズ。顔赤いで？」

平次さんがからかうようにオレを見た。

「そっ、そんなことないよ！」

オレは慌てて否定したが、心臓が未だにドキドキしている。

オレは平静を装うと必死だった。

行列が去り、もうパレードも終わろうかという時、あの悪夢は起き

たんだ。

4 a n o t h e r (後書き)

これから先も、今回のように、本編とはちょっと違う内容があるかもしれません。

ご了承ください(´・`・´)

最後のあの悪夢とは、平次が撃たれちゃった、あの発砲事件のことです。

5 a n o t h e r (前書き)

和葉ちゃんが東京にたずねてきた時のお話。

5 another

トロピカルランドでの事件からしばらくして、ある人が平次さんをたずねてきた。

「和葉ちゃん！」

その人を見た途端、蘭さんが嬉しそうに叫んだ。

「蘭ちゃん！電話、ありがとうな」

「いいのよ。服部君も和葉ちゃんがいた方が安心でしょ？」

「そつ、そんなわけないやん。あのアホのことやから、きつと何でお前がここにおるんや言うて、あたしを追い返そうとするかもしれへんし・・・」

ポニーテールをリボンでまとめた色白の女性が、大阪弁で早口でしゃべっているのを見て、

オレは彼女が平次さんの言っていた、やかましい幼馴染であることに気付いた。

「そんで、平次の具合どうなん？」

「うん。一応大丈夫らしいよ。すぐに応急処置してくれた人もいたし、急所も外してたみたいだし」

蘭さんがそう言うと、和葉さんは一気に笑顔になった。

「良かったわぁ」

「じゃ、皆でお見舞い行こっか」

蘭さんがオレに顔を向けると、和葉さんも気づいて、オレの目線に合わせるように屈んだ。

「コナン君やん。久しぶりやな」

「あ、あの・・・」

オレが口籠ると、彼女は笑って手を振った。

「蘭ちゃんから聞いたとるわ。あたし、遠山和葉や。よろしゅうな」

「こ、こんにちは・・・」

“アンタ、・・・やる？いつも平次から話聞いてんで？”

頭の中で声が響いた。

前と同じように、肝心の部分が聞き取れない。

「今、平次一人なん？」

「うっん。哀ちゃんと阿笠博士に頼んでる。前みたいに逃げ出せないように、病室でね」

「そんなら安心やね。早よ行って、一発投げ飛ばしたろ」

そう言っ腕に力を込めた和葉さんを見て、オレは一瞬寒気がした。

「コナン君、行くよ」

「あ・・・う、うん」

病院までの間、和葉さんはずっと平次さんの愚痴ばかり言っていた。

だけど、オレはその仏頂面の裏に、何か別の感情がある気がした。

「あのアホ、今度という今度は絶対許さへんで！」

「和葉さんさあ、もしかして平次さんが好きなの？」

冗談半分で聞いたつもりだった。

でも、オレがそう言った瞬間、彼女が真っ赤になったのを見て、ああ、凶星か、と思った。

「なっ、何言うとるん！？アイツはあたしの幼馴染やし、

あ、あたしは平次の姉みたいなもんや！平次はあたしのこと子分言うとるし・・・」

言えば言うほど、彼女がしゅんとしていくので、なんだか可哀想に見えた。

「そんなことないでしょ。服部君だって素直になってないだけよ」

「ら、蘭ちゃんまで変なこと言わんというて」

和葉さんがそう言っても、蘭さんはまだくすくすと笑っていた。

「大体、平次には初恋の相手があるし・・・」

「初恋の人？」

オレが聞くと、和葉さんは弱々しく頷いた。

「京都で会ったちょっと年上の子なんやって。そこで水晶玉拾った言うとったわ」

水晶玉・・・。

オレの脳裏に、ふっと小さな玉が浮かんだ。

それと桜。

その桜を、どこか切なく、懐かしそうに見る誰か。

「そーんな昔の人、もう忘れてるよ!」

「でもこの間、やっと会えた、って言うてたんよ!？」

あたしには1500年ぐらいたったたら教えてやってもええ、とか言うったで」

和葉さんには教えられない人ってわけか・・・。

なら、当てはまんのは、ただ一人、だな。

オレの推理が正しけりや・・・。

「平次はあたしのこと、女とも思ってたへんし」

オレは、未だにブツブツと文句を言っている彼女を見た。

きつと、彼は今でも、彼女を・・・。

「そんなわけないじゃない。それを言うなら新一だって・・・」
と、蘭さんは何か言いかけて口を閉じた。

「新一、だって・・・」

「工藤君がどうかしたん?」

急に黙ってしまった蘭さんを、和葉さんは心配そうに見つめた。

「ううん！何でもない」

そう言った時には、蘭さんにはいつもの笑顔があった。

「ホンマに？何かあったんなら、相談のるで？」

「ホントに何でもないの。気にしないで」

でもオレは気付いていた。

蘭さんは、辛い時でも絶対に笑う。

だが、一人になると、泣いてしまう。

だから、きっと今日も一人の時に泣くだろう。

あの工藤新一っていう人を思って。

「じゃあ、私達先に入るから、呼んだら入ってね」

「うん・・・」

病室の前で、和葉さんはチラチラと隙間から様子を見ようとしていた。

「大丈夫よ。ここで待ってて」

蘭さんは彼女をなだめると、オレと一緒に病室に入った。

平次さんは最初こそ元気そうに笑っていたが、和葉さんが顔を覗かせた途端、表情が固まった。

「か、和葉・・・」

その後、彼の病室には和葉さんの怒鳴り声と泣き声が響いた。

だけど、それを見てギョツと彼女を抱き締めた平次さんを見て、オレは先程の推理が当たっていたことを確信した。

6 a n o t h e r

その日の帰り道、オレは蘭さんと共に工藤新一の家に行った。

たいして来たかったわけでもないが、行かなくちゃいけないような気がしたのだ。

蘭さんに連れられて書斎に入った時、無性にうずうずとした。

壁いっぱいの本棚に、所狭しと並べられる推理小説。

思わず一冊を手取る。

『シャーロックホームズの四つの署名』

本にはそう書かれていた。

“すべての不可能を消去して、最後に残ったものがいかに奇妙なことであっても、それが真実となる”

不思議と浮かんできた言葉。

手に取った本を凝視していると、蘭さんがそれを覗きこんで言った。

「それは新一のお気に入り」

「へえ・・・」

「新一って、ホントに推理オタクのホームズオタクだから、口を開けばホームズがどうか、ワトスンがどうかそればかり」

呆れたような口調。

でも、語る蘭さんの瞳は優しい。

「蘭さんてさ、もしかして新一さんが好きなの？」

できればノーと言ってほしい。

オレはなぜかそう思った。

「えっ？えええええっ！！？なっ、何言つのよコナン君！」

さっきの和葉さんとおんなじような反応。

きつと図星か。

「だ、誰があんな推理オタクなんか・・・／＼／」

真っ赤になって否定されると、余計に確信してしまう。

「アイツはただの幼馴染！そう、幼馴染よ・・・」

自分に言い聞かせるような言い方。

叶わない恋だっと思っていたのかもしれない。

「そっか。・・・良かった」

オレから出たのは、そんなセリフ。

何が良かったんだ？

まだ、違うとか、そんなんじゃないとかぶつぶつ言い続けている蘭さんを、オレは見つめた。

頬を赤く染めている彼女に、胸が高鳴る。

この時オレは気付いた。

オレは彼女が好きだ。

この地球上の誰よりも・・・。

「そろそろ帰ろう」

オレは未だに工藤新一の文句を言っている蘭さんに、手を差し出した。

「えっ？」

「手・・・握った方があったかいよ」

記憶を失う前のオレが、彼女をどう思っていたかはわからない。

でも、とても大事だと思っていたことだけはわかる。

「う・・・うん」

蘭さんがそっとオレの手を握り返してくれた。

温かい彼女の手に、オレはまたドキツとした。

でもそれを誤魔化すかのように、笑った。

きつと、元に戻ったら、こんなに素直じゃられない。

だから、今のうちに素直になっておこう。

これから先も、彼女と一緒にいたいから・・・。

6 another (後書き)

ようやくここまでたどり着きました・・・！

これを書きたくて番外編を作ったusaです♪

次回からは、相当飛びます。

でも頑張りますので、見て下さい

7 another (前書き)

ウォッカとの対決のあとのお話。

7 a n o t h e r

“コナン君！”

誰かの声が聞こえる・・・。

懐かしくて、愛しい声。

“新一！”

頭の中で、ふたつの名前が響いている。

どちらも自分に向かってかけられている。

一体、どっちがオレなんだ・・・？

段々と声が遠くなっていき、オレは追いかけようとして手を伸ばした。

待って・・・

そう声に出そうとしたが、口が動かない。

声が聞こえなくなる・・・。

それと同時に、オレは目を開けた。

眩しい光が目にし込んできて、思わず痛くて目をつぶる。

体を見下ろすと、体の所々に包帯がしてあった。

そうか・・・。

オレ、あの男と・・・。

ふと、蘭さんの顔が浮かんだ。

彼女は無事だったんだろうか・・・。

オレはそつとベッドを抜け出した。

蘭さんの病室を探しながら、オレは考えていた。

あの男は誰だったんだろう・・・。

変な名前してたな。

オレが言えることじゃねえけど・・・。

一体何で、オレの命を狙ってたんだ・・・？

そもそも、オレを工藤新一って言ってたよな・・・。

確かに、あの時はオレももしかしたら・・・とは思っただけ。

今思えば、ありえないよな。

SFじゃあるまいし・・・。

じゃあ、あの時何でオレは蘭さんを、蘭、なんて呼んだんだ？

自然とそう言っただけかもしれないけど・・・。

“人が人を殺す理由なんて知らないけど、

人が人を助けるのに、論理的な思考は存在しない”か・・・。

その言葉には、覚えがある。

雨だ・・・。

雨が降ってる。

腕には誰かがいる。

オレは目の前にいる誰かに、そう言ったんだ・・・。

「江戸川君・・・？」

不意に後ろから声をかけられた。

「もう大丈夫なの？」

「灰・・・原」

彼女は顔色は少し悪いものの、もう元気そうだった。

「今行こうとしてたのよ。出歩いていいのかしら？」

「さ、さあ・・・」

「・・・じゃあなんでここにいるわけ？」

「ら、蘭さんはどこか、知ってるか？」

すると、彼女はゆっくりとひとつの部屋を指差した。

「あ、ありがとな！」

オレは慌ててその病室に行った。

ノックしても返事がなく、オレは戸惑いがちにドアを開けた。

「蘭さん・・・？」

ベッドで眠る蘭さんが見えて、オレは傍に寄った。

今は誰もいないらしく、彼女はスヤスヤと眠っていた。

無防備な寝顔をして、静かに寝息を立てている。

前にも、こんな風に彼女の眠る姿を見ていたことがある。

オレは人差し指で、彼女の頬をつついた。

彼女は少しうなると、寝返りを打った。

その時、微かだが、彼女が何かを言っていた。

「えっ？」

「・・・い・・・」

耳を澄まして、彼女の口元に耳をよせた。

「しん・・・いちい・・・」

しんいち・・・

彼女は間違いなくそう言っている。

オレがさっき見ていた夢と、同じように・・・。

“ちっちゃい頃から意地悪で、いつも自信たつぷりで、推理オタク
だけど・・・。

いざというときに頼りになって、勇気があつて、かつこよくて・・・
私新一が、だーい好き”

“わかんないの？アンタ探偵でしょ？探偵なら私の心ぐらい推理し
なさいよ！バカ！！”

頬を赤くして語る君と、涙で顔を濡らした君。

。どちらも見覚えがあるのに、どうしてこう何かが違うんだろう・・・。

“オメーのことが、好きだからだよ。この地球上の、誰よりも・・・”

“例えオレがホームズでも、無理だろうぜ。
好きな女の心を、正確に読み取るなんてことはな！”

どちらも言った覚えがある。

でもやっぱり何かが違う……。

「新一……」

もう一度、彼女は寝言を言った。

彼女の顔を見ていると、オレの頭の中で、何かざわめいた。

「蘭……」

そうか……。

オレは江戸川コナンでもあり、工藤新一でもある……。

何より一番大事なことは……。

「ふぁ……」

記憶があってもなくても、オレはコイツが好きっていう、たった一つの真実だ。

7 another (後書き)

わかりにくいかもしれませんが、
コナン君が記憶を取り戻した瞬間でした(汗)

次回から、本編のあとのお話を書きます。

よろしくお願いします>(一一)<

8 a n o t h e r

オレが記憶を取り戻してから、早いことで一週間。

解毒剤ができるまで、オレは江戸川コナンとして、未だ毛利探偵事務所にいる。

おっちゃんたちにも、オレの正体をきちんと話した。

最初、おっちゃんのヤツ、下手な冗談言っんじゃねえとか言って、オレのことぶん殴ったけど・・・。

この間、蘭に黙ってキャバクラに行ったことを決定づける証拠とオレの推理を聞かせたら、納得してくれた。

というより、蘭の回し蹴りが怖かったただけだろーけど・・・。

「そろそろお夕飯だよ」

蘭の鼻歌交じりの声がキッチンから聞こえてくる。

最近、蘭はずっとこの調子だ。

オレが退院してからというものの、いつもご機嫌で、おっちゃんがビールを10本飲んでいた時も、何も言わなかった。

それどころか、おっちゃんにお酌すると言った時、おっちゃんも熱があるんじゃないかねえか、って心配してた。

「はい、お待ちど〜」

ああ、なんか今日も随分豪勢なもんが出てきたぜ・・・。

「な、なんだ、この飯は・・・」

「えへへ。今日は奮発して、黒毛和牛買った」

おいおい、昨日は確か、特上寿司じゃなかったか？

「こんなもん毎日食ってたら、舌がおかしくなるぞ」

「あら。それじゃあ食べなくていいわよ。」

私とコナン君で食べちゃうから。ねえ、コナン君」

「あ・・・う、うん・・・」

正直おっちゃんの見解に賛成だぜ・・・。

だけど、飯抜きつてのもきついから、オレは目の前にある肉の塊を食べはじめた。

「美味しい？」

「お、美味しいよ」

でもこんな大量に食べつかよ。

「ちつ。仕方ねえな」

おっちゃんもぶつぶつ言いながら食べている。

「それよりお前、いつまでここにいる気だ？」

「えっ？」

いきなりフォークの先をオレに向けておっちゃんと言った。

「お前の家に入れねえっつーことはねえだろ」

「いいじゃないお父さん。この姿じゃ一人暮らしには不便なもの。哀ちゃんが薬を完成させるまで！」

「それまでこんな飯が続くのかぁ・・・」

肉を見つめて、おっちゃんは悲しそうに呟いた。

普通だったら喜ぶべきことだらけけど、この食事のせいで、おっちゃんの楽しみの半分は消えたみてえだしな。

そうそう。

最近ここに依頼も来ねえし。

「何よ。文句あるの？」

「「ありません」」

「よろしい」

おっちゃんはまた、深いため息をついた。

少しおっちゃんに同情。

「あつ。コナン君。また口の周り汚して・・・」

突然蘭がオレの口元を見て言った。

「えっ・・・？」

「じつとしてて。ほら・・・」

蘭の顔が近づいてくる・・・。

いや・・・

その・・・

「コラアツツ！ー！蘭！そいつにそれ以上近付くんじゃねえぞー！」

「えっ？何で？」

・・・ちっ。

「なんでつてお前なあ」

「今はコナン君なんだからいいじゃない。ねえ」

「あ、あはは・・・」

子供扱いしやがって・・・。

「ったく。コナン！蘭から3m離れろ！」

「それじゃ話できないわよ」

「何でもだあ！」

・・・早く元に戻りてえ。

色んな意味で・・・。

8 a n o t h e r (後書き)

何となく浮かんだ風景・・・。

おっちゃん怒りMAX状態(汗)

めちゃくちゃですみませんでした> (() <

9 another

「いい？しばらくは大人しくしてるのよ」

「へいへい」

体が重い・・・。

新一の体って、こんな重かったのか。

オレは体を起こそうとしてやめた。

元に戻ったばかりで、とても起き上がる気力がない。

大体、灰原も突然すぎんだよ。

朝に電話寄こしたと思ったら、なーにが、さつさと来ないと薬に足がはえてがなくなるわよ、だ。

あれから蘭を説得すんのも苦労したぜ・・・。

オレが灰原に対して悪態をついていると、ドアがノックされた。

「はい？」

「あ・・・わ、私」

蘭か・・・。

「入れよ」

「お、おじゃましまーす・・・」

蘭はドアをちよつと開けて、ベッドでゴロゴロしているオレの姿を確認した。

「し・・・新一だぁ・・・」

「ハア？あたり前だろ、バーロ」

「だつてえ・・・」

徐々に蘭の目が潤んで行くのを見て、オレは慌てて言った。

「いや、あ、ありがとな、来てくれて」

だが蘭は、しばらくオレの顔をジツと見つめたあと、何を思ったか、オレの顔をつねった。

「いてっ。おいっ、やめろよ!」

「夢じゃない、よね・・・?」

そう言つて、蘭はまたオレの頬をつねる。

「いてえっつの!」

「キッドでもないわよね・・・?」

「んなわけねえだろ!」

あのコソ泥と一緒にすんな。

オレはそう怒鳴ろうとしたけど、蘭の安心したような笑顔を見ているうちに、

そんな気も失せてしまった。

「明日から学校来れるの？」

「どうだろーな……。灰原はしばらく安静、って言ってたけどよ」

そーいやアイツ、元に戻んねえのかな。

「じゃあ、私、傍にいる」

「……。え？」

「ダメ？」

いや、ダメって……。

そんな上目使いに言われても……。

「べ、別に……。いいけど……。」

オレがしどろもどろに答えると、蘭はパアツと顔を輝かせた。

「良かった！」

「でもおっちゃん、1人にしていいのかよ？」

「大丈夫！お母さんにお父さんが寝込んでるって言っちゃったの。今頃大慌てで家に行ってるはずだから」

抜け目のねえ奴。

「何かご飯作ろっか」

「あ、ああ。サンキュ」

蘭はもう一度笑って部屋を出て行った。

「ハア・・・」

オレは再びベッドに倒れ込んだ。

そのまま疲れて眠ろうとした。

だが、ジャマが入った。

P R R R R R R R R R・・・

・・・嫌な予感がする。

オレは恐る恐るケータイを見つめた。

「・・・やっぱりな」

“服部平次”

その名前を見た途端、オレは今までの数倍疲れを感じた。

だが無視をしようとしても、コイツのことだから、オレが出るまで永遠にかけ続ける・・・。

「・・・もしもし？」

『工藤！』

オレは思わずケータイを耳から遠ざけた。

「なんだよ？」

『ホンマやったんか！元に戻ったんやて！？』

「ああ。・・・んで？なんの用だよ？」

『素っ気ないやつちゃんあ。お前の復帰祝いや。東都駅まで迎えよろしゅうなあ』

「ハア！？おいつ服部！」

ブツツ・・・ツ・・・ツ・・・。

・・・切れた。

あのやろお・・・。

「新一？何叫んでんの？」

蘭が驚いた様子でお玉片手に戻ってきた。

「東都駅だよ」

「？何が？」

「・・・説明するだけで腹が立つ。行くぞ」
「えっ？ちよつと！」

オレは半ば強引に蘭の手を引っ張って家を出た。

「新一！哀ちゃんに安静にしててって言われたんでしょ？」

「しゃーねえだろ。よろしくって言われちまったんだからよ」

「だから誰に！？」

「行きゃーわかんだろ！」

元に戻って早々、何でオレはこんな目に遭うんだよ！？

9 another (後書き)

新一君の心の叫びでした……。

きつとこのあと、哀ちゃんに手錠をかけられて、部屋に監禁されることでしょう。

次回もよろしくお願いします> (一一)<

10 another

不機嫌なまま、オレと蘭は東都駅にいた。

あのヤロー、迎えに来いとか言っというておせえな……。

オレはまた時計を見た。

これで26回目だ。

蘭は暇そつに地面を見ている。

思わず舌打ちしそうになった時、アイツは来た。

もちろん、隣には自分と対照的な色白の彼女を連れて、

「工藤ー！」

と、迷惑な大声をあげながら。

「遅い」

イライラと告げるオレに対し、服部は満面の笑みを浮かべている。

「そうそう、それでこそ工藤や。お前に平次さんとか呼ばれた時には、

ごつつ気味悪かったわあ。思い出すだけでゾォツと……」

「ぶっ飛ばすぞ、テメェ……」

「はいはいはい、ストップ」

蘭が横から割りこんできた。

「せっかく来てくれたんだから。ケンカしないでよね」

「せやせや。特にアンタ、まだケガ完璧に治ってへんやろ」

和葉ちゃんは服部の脇腹をツンとつついた。

「おわつ。ま、まだ痛いんやからやめいッ」

「大人しくしとったら痛くはならへんやろ」

いつものやりとりが始まる前に、オレは歩き出していた。

「あつ。新一い！」

と、蘭が慌てて追いかけてきた。

「どうしたのよ？」

「別に・・・」

「何怒ってんの？」

「・・・別に」

お前との2人っきりの貴重な時間をジャマされたから・・・。

なんて言えつかよ！

「工藤、えらいイラついとるな。カルシウム足りひんのやないか？」

「うるせーなあ」

「なんや。心配してやってんねんで？」

テメエの顔はただからかつてるだけにしか見えねえんだよ！

「お。そやさ。聞きたいことあったんや」

服部は急にオレの腕を掴むと、蘭たちから離れた。

「なんだよ？」

「お前、ねえちゃんとどこまでいったんや？」

「・・・は？」

「とぼけんなや。告白、したんやろ？このこの」

服部はニヤニヤとしながらオレを小突く。

「う、うつせ。まだしてねえよ」

「そらおかしいなあ。ちつこい姉ちゃんから聞いたんやけど。病室でイチヤイチヤしとった、って」

灰原のヤツ・・・。

盗み聞きしてたのかよ・・・。

「で、どうなんや？」

「・・・確かにあの場の勢いで告げたけどよお・・・」

「おお！ホンマか！？」

「あの時のオレは、まだ江戸川コナンだ。

だから、蘭にはあの時の告白は忘れとけ、って言った」

「そうやったんか。そのまま付き合えば良かったやないか」

服部は頬をポリポリと搔いた。

「ま、お前みたいながキにはわかんねえよな」

「し、失礼なやつちな！この間までちっこいガキやったくせに」

「オレは精神年齢のことを言ってるだよ」

「オレはガキとちゃうわ」

「いや。ガキだな。まずお前は自分の彼女に対する気持ちさえわかってねえし」

「何のことや？」

「・・・説明すんのめんどくせえ」

オレは服部の腕を振りほどくと、おしゃべりに花を咲かせている蘭たちのもとに行った。

今は笑ってるけど、和葉ちゃんって相当苦労してんだろ・・・。

11 another

結局、しばらくこっちに泊まることになった服部と和葉ちゃん。

勝手にオレの家に。

すると、蘭も自然と泊まることになり、4人でオレの家に向かっていた。

家に戻ると、オレはチラッと阿笠博士の家の方を見た。

アイツに外に出たことがばれたら、ひでえ目にあわされそうだから・・・。

「どないした、工藤？」

「いや・・・。何でもねえ。ほら、早く入れよ」

半ば押し込むような形で、オレは3人を中に入れた。

「うっわぁ。広いんやねえ。工藤君ち・・・」

まず和葉ちゃんが口を開いた。

「でも掃除とか大変だよ？特に書斎とか、本がたっくさんあって、埃落とすのが大変だもん」
と、蘭が愚痴をこぼした。

「ヘイヘイ。悪うございました」

そうだ。

。アイツがオレの様子を見に来る前に、オレ部屋に戻んなきゃな・・・

「わりい。2人は2階にある客室好きなどこ使っていいからよ。オレはアイツが来る前に・・・」

「あら？アイツって誰のことかしら？」

この暑いのに、オレは悪寒がした。

「哀ちゃん。こんにちは」

「どうも」

蘭と和葉ちゃんに少し笑顔を向けてから、灰原はオレに冷酷な視線を送ってきた。

「大人しくしてろって言わなかった・・・？」

「あーいやその・・・」

「蘭さん。悪いけど、彼の腕、片方押さえといて」

「う、うん・・・」

蘭に左腕を掴まれた。

灰原はニヤツとすると・・・オレの右腕に手錠をかけた。

「なっ、なんだよこれ！」

「私が許可するまで脱走できないようにするのよ。自業自得」

そのまま疲れて反抗する力もなく、オレはずるずると灰原と蘭に引きずられていった。

ベッドに手錠でつながれ、身動きは全く取れず。

「これであなたがいつも捕まえている犯人さんたちの気持ちもわかるんじゃない？」

「オレは囚人じゃねえ！」

「早く釈放されたいなら、ここで絶対安静にしていることね」

灰原はそう言っ、また冷やかな笑みを浮かべた。

「哀ちゃんもお夕飯食べてく？今日はハンバーグなの」

「そうね……。じゃあ、せっかくだし、いただきこうかしら」

夕飯と聞いて、オレは腹がグウ……と鳴った。

「あのさ……オレの飯は？」

「新一は、お粥！」

「……マジかよ」

余計にどつと体が重くなってきた。

「消化にいいものにしないとね」

「食べ終わったら、この薬を飲んでおくこと」

灰原はオレのベッドの脇に、錠剤がいくつか入ったケースをおいた。

「それじゃ」

「一緒に買い物行く？和葉ちゃんと3人で」

「ええ。いいわよ」

「お前ら、やけに仲いいな・・・」

珍しく楽しそうに話している灰原と蘭を見て、オレは言った。

「当たり前じゃない！友だちだもん。ねえ、哀ちゃん」

「・・・どうかしらね」

「えっ？」

灰原は1人で部屋を出て行った。

出ていく直前に、アイツの耳が少し赤くなっていたのが見えた。

「相変わらず素直じゃねえな」

オレは思わず苦笑した。

「私も行くね、新一」

「あ、ああ」

蘭も出ていき、部屋が急に静かになった。

「・・・ヒマだな」

すると、外でガチャツという音がした。

・・・えっ？

「まさかあいつ・・・」

オレはドアに駆け寄ろうとして、手錠をかけられていることを思い出した。

「外からカギかけやがったな・・・」

11 another (後書き)

最近何が書きたいのかよくわからなくなっているusaです♪

そろそろ、コナン君以外の目線も出てくるかも・・・。

あ、でも次回は、まだ、コナン君目線です。

では、次回もよろしく願います>(一一)<

12 another

しばらくボーっとしていると、ドアのかぎが外れる音がした。

「入んでえ」

と、服部が顔を覗かせた。

「なんだよ？」

あからさまに不機嫌な態度をとるオレに、服部は面白くなさそうな表情をした。

「来ちゃ悪いみたいやんか。そうそう。ねえちゃんの手料理、めっちゃ美味かったわぁ・・・」

「・・・嫌味かよ？」

こっちはお粥だけで全っ然腹いっぱいになんなかったのによぁ・・・。

「んなおっそろしい顔すんなや。せやせや、オレの部屋な、工藤の部屋の隣のとな・・・」

「へーじい！」

突然大声がして、今度は和葉ちゃんがやってきた。

「やっぱここにおった」

「な、なんや急に・・・」

「あたし、工藤君の隣の部屋やから。工藤君、何かあったら、すぐ

呼んでええよ」

服部の眉がピクツと動いたのを、オレは見逃さなかった。

「何でお前が工藤の隣やねん」

「別にええやん。蘭ちゃんと同じ部屋が良かったんやもん」

因みに隣の部屋は、いつも蘭が泊まっていく部屋だ。

「ねえちゃんとはとかく、お前はすぐに荷物移動せい」

「えっ？何でなん？」

「何でもや！」

和葉ちゃんは不思議そうに服部を見ていた。

「変な平次」

「うっさいわ、ボケ」

「なんやて！？」

「ケンカすんなら他所でやれよ」

オレが言くと、2人は洪々と離れた。

「お前、オレの部屋の隣にしとけ」

「何でアンタに決められなアカンの？」

「何でもや言うつるやろが！」

最後に服部が怒鳴ると、和葉ちゃんは口をとがらせて出て行った。

「んな怒んなよ」

と、オレは言ったが、服部は聞いてねえみたいだった。

「なあ服部」

「・・・何や？」

「お前はさ、何で彼女がオレの部屋の隣にいるのが嫌なんだよ？」

服部はしばらくの間黙っていた。

「・・・そら、子分が別の男の隣の部屋におんのはな・・・」

「んじゃ、もし彼女に彼氏ができたらどうすんだよ？」

ほんのちよつとからかったつもりだった。

だが、なぜか服部は怒鳴りだした。

「アホオ！！そんなんオレがボッコボコにしてやるわ！」

「・・・それはなんでだ？」

「せやから、子分やから・・・」

頭が痛くなってくる・・・。

オレは思わずため息をついた。

「オレもさ、もし蘭に近付く男がいたら、例えお前でもボッコボコにするけどよ・・・」

「そらそうやるな」

「でも蘭はオレの子分じゃねえぞ？」

服部はまた考えこんだ。

「蘭のことが大切だから、守ってんだろ。お前だって、そうなんじ

「やねえの？」

「そら・・・子分は大切やけど」

段々とイライラして来た・・・。

「ちげえよ！お前はな、子分じゃなくて、女としての和葉ちゃんが大事なんだろ！？」

「・・・は？」

「だから・・・。お前は、彼女が好きなんだろ、って言ってんだよ！」

「なっ・・・／／／」

服部は顔を真っ赤にさせると、再びオレの耳元で大声を出しはじめた。

「アホかあっつー！！お前らと一緒にすんなやボケ！誰があんなやかましい女」

「よく言っぜ。お前らだって、この間病室で抱き合ってたじゃねーか」

「そ、それはやな・・・。・・・お前らってことは、工藤らも、ってことやな？」

墓穴を掘ってしまった・・・。

「あー・・・いや、それはその・・・」

「なんや、オレらのこと言えへんやないか」

形勢逆転、というのだろうか・・・。

「お前やって、ねえちゃんに告白しとらんでいうとったやないか。」

オレと和葉がどうこう言う前に、自分の彼女捕まえとき」

「う、うっせバーロ！」

「2人とも？何騒いでんの？」

「平次ー、部屋移しといたで」

このあとオレ達は、突然部屋に現れた風呂上がりの蘭と和葉ちゃんを見て、

2人そろって熱を出したとさ・・・。

12 another (後書き)

純情な新一君と平次君でした・・・ (笑)

13 another (前書き)

初、平次視点。

13 another

「どないしたん平次。さつきからボーっとして・・・」

和葉が不意に、オレの顔を覗きこむ。

「な、何でもないわ」

オレはプイツと目をそむける。

なんや、顔があつうてかなわん。

工藤のせいやぞ・・・。

誰がこんな女に惚れるかいな！

「そんな物好き、おるわけあらへんやろ・・・」

「？何なん一体」

和葉がまたオレを不思議そうに見つめておったけど、オレは無視して歩き出した。

にしても・・・。

人が多いなあ、ここは。

工藤とねえちゃんに連れられて、オレと和葉も来てみたはええけど・・・。

なんやこの渋谷とかいう場所は！

人が多すぎて前に進めへんやないか！

工藤もねえちゃんも姿が見えへんし、これじゃオレら迷子同然や・・
・。

「あつ！平次、あれ蘭ちゃんとちゃう？」

和葉が前の方を指差した。

「よっしゃ、離れへんようにしていくで・・・って、聞けや！」

オレの言葉を待たずして、和葉は1人で姉ちゃんらしき人の方へいってしもった。

「なんなんやアイツは・・・」

オレはぶつぶつ言いながらも、和葉を追いかけた。

「おい和葉！どこや？」

人込みをかき分けて和葉を呼ぶ。

でも、返事がこうへん。

「だから離れんな言っただんに・・・」
「服部！」

そこへ、工藤が来た。

「なんや1人かいな」

「ら、蘭知らねえか？」

工藤はオレの前まで来ると、膝に手をつけて呼吸を整えとる。

「知るかい、んなこと」

「和葉ちゃんは？」

「今オレも探しとるとこや。」

あのアホ、ねえちゃん見つけたとか言うて、先行ってしもつたんや」

さつき和葉が指差した方を見るけど、和葉達の姿は全く見えへん。

「蘭の奴……。だから離れんなよって言ったのに……」

どっかで聞いたセリフやな。

「2人で一緒におるかもしれへんで。ほな、探しに行こか」

「ああ……」

せやけど、こんな所で闇雲に探したところで見つかるわけもないしな……。

「とにかく、オレらも離れねえようにな」

「せやな」

とりあえず、2人が行きそうな店を順番に見てみたんやけど……。

「おらへんやないかい！」

「落ち着けよ・・・」

憤慨するオレを余所に、工藤は別の店に目を向けておる。

「次、あそこ見てみるぞ」

そう言うと、ムスツとしたオレを引っ張ってそこに連れていく。

「蘭だったら、絶対この辺を見て回るはずなんだけどな」

「和葉のことやし、ねえちゃんにお勧めの店とか連れてってもらつとるやろな」

和葉達がいなくなってもよしでも、もう20分はたつとる。

そろそろ連絡とかあってもよさそうなはずやけど。

「お前、ねえちゃんから電話きてへんのか？」

「いーや。お前の方は？」

「全くや」

2人そろってため息をつく。

「ここまで探していないとなると・・・やっぱ事件の可能性とかも出てくるよな」

「せやな。なら人通りの少ない道とか行ってみよか」

「そうだな」

裏道には、人が全然おらんかった。

「ここなら誘拐とかも・・・」

「待て」

オレが言いかけた時、工藤がなぜか走り出した。

「お、おい工藤っ」

オレも慌てて追いかける。

なんなんやアイツは・・・。

途中、工藤はいきなり泊まると、電柱の陰に隠れた。

まさか、誘拐犯がおるんか！？

「かくれろ、服部」

「お、おお」

オレも近くの自販の後ろに身を隠して、工藤が見つめる方を見た。

「・・・何やあれ」

和葉達がおった。

それはええとして・・・。

誰やアイツら。

「工藤・・・」

と、声をかけようとして、オレはやめた。

いや、かけられへんわ。

こついうんを、鬼の形相、って言うんやろな。

そないまでねえちゃんが大事なら、早よくっ付けや！

「触らんといて！」

急に和葉の怒鳴り声が耳に飛び込んできおって、オレは振り向いた。

和葉とねえちゃんは、互いに寄り添いあって、目の前の男を追い払おうとしている。

にもかかわらず、男がニヤニヤと和葉ににじり寄って……。

……アカン。

無性にイライラしてきよったわ。

あの男、オレの和葉に……。

って、ちゃうわ！誰がオレの和葉やねん！

和葉はオレの子分で、せやから勝手に言いよられんのが気に入らへんだけで……。

「服部」

工藤がいきなりオレを呼んだ。

「な、なんや」

工藤は無言で和葉達を指差した。

それを見た途端、オレはつい走り出した。

「・・・和葉っ」

「へ・・・平次」

もうすぐで車に乗せられそうになった和葉の腕を、オレは無理矢理つかんだ。

「何しとんのや、にいちゃん」

「あ・・・いや、その・・・」

男は急に慌てはじめて、愛想笑いを浮かべながら走っていった。

「あ、ありがとな。へい・・・」

「このアホおっ！！どこいつとたんじゃボケエツツ！！」

安心と怒りで、オレはつい怒鳴ってしもた。

「う・・・ごめん」

珍しくしゅんとしている和葉。

そないな顔されたら、何も言えへんやないか・・・。

「服部君、和葉ちゃんを怒らないで。私もボーっとしてたから・・・」

「何がボーっとしてただよ！どんだけ心配したと思ってんだ！」

いつの間にか工藤も来て、オレと同じく姉ちゃんに怒鳴った。

「大体な、お前はおっちょこちょいやねん。もう少しオレの話聞かんかい！」

「あつ・・・へ、平次！」

「話聞け言うつるやろが！」

「み、見て見て！」

「あ？」

和葉があまりにもうるさく言うから、オレは渋々振り返った。

そしたら、言葉を失ってしもた。

工藤が・・・ねえちゃんにキスしとる。

ねえちゃんの顔は見えへんけど、なぜか綺麗な光景やった。

「・・・ええなあ」

和葉がポツリと言うのが聞こえた。

確かに・・・うらやましいのかもしれないけど。

和葉はキスしたいんか？

誰と？

「帰るぞ」

「えっ？ちよつと！」

工藤がねえちゃんの手を引つ張つて連れてく。

一瞬2人の顔がはつきり見えたわ。

2人そろつて、真っ赤つかやった。

でもそれがまた初々しいんやろな。

「あ、あたしらも帰ろ？」

と、和葉がオレの服を掴んだ。

その様子が可愛らしくて・・・オレはまた目を逸らした。

「もう離れへんようにな」

「うん」

ぴつたりとオレにひつついて歩く和葉。

コイツも、可愛いところあるやん。

13 another (後書き)

思えば平次の目線は初めてのusaです。

なんか、初めとだいぶ話がずれてきてるなあ・・・。

もうしばらくお付き合いください！

14 another (前書き)

渋谷での事件(?)

蘭ちゃん目線です。

14 another

「どおしよ・・・」

新一とはぐれちゃった・・・。

服部君や和葉ちゃんもいないし・・・。

私もしかして、迷子？

「新一」

とりあえず名前を読んでみるけど、この人の多い渋谷では、きっと聞こえない。

こんなことになるなら、無理してこなければよかった。

せつかく哀ちゃんに新一の外出許可貰ったのにな・・・。

「蘭ちゃん」

「和葉ちゃん」

「良かったわあ。まちごうてたらどないしyo思ってたんよ」

人混みの中から出てきた和葉ちゃんに、私はホッと胸をなでおろした。

「1人で心細かったの。和葉ちゃんが来てくれてよかった」

そこで私はきよろきよると後ろを見回した。

「服部君は？」

「えっ？おらへんの？」

一緒かと思つてただけど・・・。

「変やねえ。さっきまでおつたんやけど」

「新一もいなくなつて・・・どこに行つちやつたんだろ」

「あの2人なら、もしかしたら一緒におるかもしれへんで。探しに行こ」

「う、うん・・・」

はぐれないように手を繋ぎながら、私たちは2人を探しにいった。

「この人の多さじゃ、見つからへんね」

「ホント。もしかしたら、人の少ない通りに行つてるのかも」

「そんなら裏の方行つてみる？」

お店の横にある細い道を通つてみる。

「いないね」

「せやね・・・」

なんか、表通りと違って、不気味・・・。

あれ？ここどっちに向かつてるんだろ？

わからなくなつてきちゃった・・・。

「平次、電話したら気付くんかな？」

そうだ。

ケータイがあつたんだ！

私は思い出して、慌ててケータイを取り出そうとした。

だけど、突然ケータイを誰かに取り上げられた。

「どうも、こんにちは」

だ・・・誰？この人・・・。

「アンタ誰や？」

「ん？オレ？通りすがりの王子様、ってやつかな」

・・・何それ。

「何が王子様や！蘭ちゃんのケータイ、早よ返して」

「へえ。君、関西の子？大阪弁って、なんかいいよねえ」

自称王子様は、私にケータイを返すどころか、なぜか詰め寄ってきた。

「君たち道に迷ったんでしょ？オレが案内してあげるよ」

「ホンマ？」

「もちろん。オレ、王子様だもん」

し、信用できない・・・。

けど・・・。

こうしていても、新一たち見つかりっこないし・・・。

「じ、じゃあ、よろしくお願いします・・・」

王子様はニコツと笑って、私たちの前に立った。

「そんで、アンター体誰なん？」

「だから、王子様だよ。迷子の子猫ちゃんたちを救うね」

「・・・・・・・・・・」

本当にこの人、道あつてるのかな・・・？

何だかさつきよりも静かなんだけど・・・。

「蘭ちゃん。この男、怪しいと思わへん？」

「や、やつぱり・・・？」

「このままついてってええんかな？」

「どうか・・・。あの！この道であつてるんですか？」

私は大声で聞いたけど、王子様は聞こえないみたいで、どんどん先に行く。

ますます怪しい・・・。

「ねえ和葉ちゃん。戻ろう」

「そ、その方がええよね？」

私たちは顔を見合わせて頷くと、王子様に言った。

「あたしら、やっぱ戻るわ」

「連れが心配してるんで」

すると、王子様が振り返った。

「そう？じゃあ仕方ないね」

なんだ。

もっとしつこいかと思ってた・・・。

「あの・・・私のケータイ」

「これ？もうちょっと預からせてもらっよ」

えっ・・・？

「な、何でなん？」

「だって、その連れに連絡されたら困るじゃん」

「どうして・・・」

私が言い終わらないうちに、王子様が私達を壁際に追い詰めた。

「ここまで案内したお礼。ちゃんともらっからね？」

「な、何言ってるん！？触らんといて！」

「そ、そうです！大声で叫びますよ！」

でも王子様は気にせず、私達に近付いてくる。

「ここはさ、表通りとはかなり離れてるんだ。叫んでも誰も気づかないよ」

和葉ちゃんが腕を掴まれた。

「はっ、放してっ」

「そう騒がないでよ。オレだって優しくしてあげたいんだからさ」

私の方にも腕が伸びてくる。

こうなったら空手で・・・。

「和葉っ」

「へ・・・平次」

服部君・・・。

てことは、新一も？

私は辺りを見回した。

すると、新一が電柱の陰にいるのが見えた。

私がそっちに行こうとしたら、手で止められた。

よくわからないけど、今はじっとしておこう。

「このアホっ！！！！心配したやるボケっっ！！！」

突然耳に服部君の怒鳴り声が聞こえてきて、思わず耳を塞いだ。

「う、ごめん・・・」

和葉ちゃんが謝ると、服部君も少し落ち着いたのか黙った。

「服部君、和葉ちゃんを怒らないで。私もボーっとしてたから・・・」

「何がボーっとしてただよ。どんだけ心配したと思ってんだ！」

新一が私の隣に来て、同じく怒鳴りはじめた。

「お前は隙がありすぎんだよ！方向音痴のくせに急にいなくなっ
てこんなところまでノコノコついてって」

「あ、あの・・・」

「大体、オレらがもう少し遅かったらどうなっただと思う！？
今頃どこか連れてかれてたんだぞ！」

「な、何よ！無事で良かったとかないの？」

「彼氏でもないくせに、偉そうに言わないでよ！」

思わず私まで怒鳴っていた。

「な、何か・・・最後に余計なこと言っちゃったような・・・」

「ああそーだな。じゃあ勝手にしろよ」

「・・・怒らせちゃった。」

でも、あの告白を忘れろって言ったの、新一じゃない。

あれ以来、何事もなかったみたいにふるまってくるし・・・。

隣の和葉ちゃんをチラッと見た。

服部君は怖い顔をして怒ってるけど、少しホッとしたような表情をしていた。

ホントは、和葉ちゃんが心配で、どうしようもなかったんだよね。

それに比べて・・・。

何で新一は・・・。

「ハア・・・」

ついため息がこぼれる。

どうしていつもこうなんだろ。

「し・・・新一」

そっと声をかけてみる。

「・・・なんだよ」

こゝ声が怒ってる・・・。

「いゝ、ごめん」

「・・・謝ることじゃねえだろ」
「えっ？」

不意に、グイツと腕を掴まれて、新一に抱きしめられた。

「なっ・・・／＼／」

「オレ、素直じゃねえから、その・・・。つい怒鳴っちゃったけど、ホントはお前が無事で良かったって思ってるし、もう少し遅かったら、って想像したら、

あの男ぶっ殺したくなるくらいム力つくし・・・」

新一、手が震えてる・・・。

あのいつでも自信満々な新一が。

そう思ったら、なぜか新一が可愛く見えた。

ぎゅっと抱き返すと、新一が耳元で囁いた。

「好きだ・・・」

驚く暇もないまま、唇をふさがれた。

顔がどんどん熱くなってくる。

でも、何も抵抗できない。

後ろから視線を感じる。

「「あ・・・／＼／」

和葉ちゃん達に見られてた・・・／＼／。

「か、帰るぞ」

「ちょ、ちよつと」

2人そろって恥ずかしくなって、少し俯き加減に歩きだした。

チラッと新一の顔を見ようとする。

表情は見えないけど、耳が真っ赤。

たぶん私も・・・。

でも、今は幸せ。

だって、今度は堂々と、新一の手をつなげるもんね。

14 another (後書き)

何だかめちゃくちゃですみません(汗)

とりあえず、書きたかった話は書けました。

次はどうなるんだろ・・・。

見て下さい

L a s t a n o t h e r

渋谷での出来事から、オレと蘭は正式な恋人になった。

因みに、服部と和葉ちゃんはまだ。

アイツ、何であの時和葉ちゃんがいなくなったことを怒ったのか、
って聞いてみたら、

“ 当たり前やろ、子分が親分の傍を離れるなんて、言語道断や ”
とか言ってたな。

ホント、素直じゃねえっつか、ガキっつか・・・。

「 どうしたの、新一？ 」

不意にオレの顔を覗きこむ蘭。

「 べつに、何でもねえよ 」

照れくさくて、オレはわざとぶっきらぼうに言って目を逸らす。

オレと蘭は今、トロピカルランドでデート中。

前に来た時は、事件やらオレがコナンになったりやらで、あんま楽しめなかったからな。

蘭が記憶喪失になった時も、オレがそうだったときも、命を狙われて、それどころじゃなかったし。

だから今日こそは、と思ってた。

まあ、途中目を離れたときに蘭がナンパされていた、という事件は3、4回あったけどな。

夜も近づき、蘭の今日最後の我儘で、オレ達はパレードを見ていた。

「きれい・・・」

確かに綺麗だ。

だけどやっぱり・・・オレにとっては、蘭の方が綺麗だ。

「でも、何もなくてよかった」

「へ？」

「だって、新一とここに来ると、必ず何か起きるんだもん」

そう言っただけに笑う蘭は、たてようもなく可愛くて・・・きつと、この人混みじゃなかったら、オレは蘭を抱き締めてたと思う。

パレードが終わっても、蘭はまだ楽しそうに頬を紅潮させていた。

「楽しかったね、新一」

「あ、ああ・・・」

「?どうかした?」

「い、いや、何でも・・・」

あたりが暗くて助かった、とオレは思った。

たぶん、今のオレの顔は真っ赤だから。

こんな顔、蘭には恥ずかしくて見せらんねえよ……。

「もう閉園時間か……」

蘭が時計を見てため息をついた。

11時5分前。

なら、まだ間に合うかな……。

「よし、行くぞ！」

「えっ？ど、どこに？」

「いいから」

オレは半ば無理矢理蘭の引っ張って、あの噴水に連れてった。

「今日最後の噴水だぜ？」

「そっか……」

10……

9……

8
.
.
.

7
.
.
.

6
.
.
.

5
.
.
.

4
.
.
.

3
.
.
.

2
.
.
.

1
.
.
.

「
.
.
.
わあっ
」

蘭が歓声を上げた。

夜だから、噴水もライトアップされていて、すごく美しかった。

「蘭。ちょっと後ろ向けよ」

「何で？」

「早くしろって」

渋々と蘭が後ろを向くと、オレはあれを取り出した。

「はい、OK」

「・・・これ」

「さつき土産物屋で見てただろ？そのネックレス・・・」

その時にこっそり買ったもの。

「まあ、今まで待たせたお詫びと、お礼・・・」

「・・・うれしいっ」

蘭は今日一番の笑顔を見せた。

そして、もう噴水は下がっているにもかかわらず、オレに飛びついた。

「ありがとう」

「・・・オレこそ、ありがとうな」

オレはそっと蘭にキスをした。

「オレさ、最初コナンになった時、すっげえ嫌だった」

「・・・うん」

「でも、そのおかげで、お前がどれだけ大切かわかったし、記憶がなくなつて、まあちょっとは素直になれたし・・・」

「・・・そうだね」

「だから・・・コナンに感謝、だよな」
「うん」

もう一度、唇を重ねる。

コナンになって良かった。

コナンがいなかったら、今のオレも存在しない。

きっと、蘭ともこうしていない。

だからやっぱり、江戸川コナンになれて、良かった・・・。

L a s t a n o t h e r (後書き)

えゝすみません。完結です(汗)

期待はずれだ・・・と、思った方々、

大変申し訳ございませんでした> (――) <

これからもu s aをよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6748v/>

For the memory ~ Another story ~

2011年10月7日09時06分発行